Japanese Association of Educational Psychology

336 Jap. J. of Educ. Psychol., 1985, 33, 336—344

思春期の身体発育と性役割意識の形成について

斉 藤 誠 一*

THE RELATIONSHIP BETWEEN PUBERTAL GROWTH AND SEX-ROLE FORMATION

Seiichi SAITO

The purpose of this study was to investigate the relationship between pubertal growth and sex-role formation. In a first study, a sex-role scale for early adolescents, containing 9 masculine items and 6 feminine items, was constructed. In a second study, recognition and acquisition of masculine traits and feminine traits were related to variables concerning pubertal growth. The main results were as follows : 1) Height had little influence on either recognition or acquisition of masculine traits and feminine traits. 2) Mature boys showed significantly higher level of masculine trait acquisition than immature boys. 3) Both boys and girls who were satisfied with the important parts of their bodies showed significantly higher level of masculine and feminine trait acquisition. 4) It was found in both males and females that the level of acquisition of masculine traits and feminine traits were associated with some of the variables concerning pubertal growth, without recognition of them.

Key words: pubertal growth, sex-role formation, masculine/feminine traits, early-adolescents

問　題

思春期は，身体発育のスパートと第二次性徴と呼ばれる性的成熟の発現を特徴とする。これらの急激で大きな身体的変化は，青年に心理的動揺を与え，それまでとは異なる新しい自己を形成する契機になると考えられてきた。多くの研究者は，青年期を苦悩に満ちた不安と混乱の時期ととらえ，その端緒を思春期の身体的変化においた。少なくとも，一般にはこうした身体的変化が，青年の心理的側面に大きな影響を及ぼすと考えられている。

思春期の身体的変化の時期に注目した研究に，早熟者と晩熟者の比較研究がある。古くは Mussen & Jones (1957), Jones & Mussen (1958) において，男子についても，また彼らの予想に反して女子についても，早熟者の優位性が指摘されている。すなわち，晩熟者が否定的自己概念や不適応感，自己拒否感をもっているのに対して，早熟者は自尊心や独立心，望ましい自己概念をもっていることが示されている。同様の見解は，Cole & Hall (1970) でも認められているが，Peskin (1967) はこれとは反対に晩熟者の優位性を展開している。すなわち，晩熟者は思春期へ移行するまでの準備期間が長いため，十分な準備がなされないまま思春期に移行していく早熟者よりも，望ましい適応を示すというものである。この早熟者と晩熟者の比較研究については，今なお一致した見解は見られていない。

また，思春期の性的成熟と心理的適応についても，いくつかの研究が見られるが，女子の初潮に関するものが多い。Rierdan & Koff (1980) は，既潮者と未潮者を比較し，心理的不安のレベルには差がないものの，既潮者の方が，性的識別，性的同一性が明確になっていることを見出している。このことは，初潮が心理的混乱を引き起こすよりは，女性としての統合をもたらすことを示している。従来，初潮の否定的影響が強調されてきたが，近年ではむしろこうした肯定的影響が注目され，Koff, Rierdan & Silverstone (1978), Greenberg & Fisher (1984) においても，この点が認められている。ところが，男子の場合，精通を性的成熟の基準とすることが多いが，その心理的影響については初潮の場合ほど検討されていない。しかしながら，男女とも性的成熟による心理的混乱は，従来より少なくなっており，それら

* 上越教育大学 (Joetsu university of Education)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

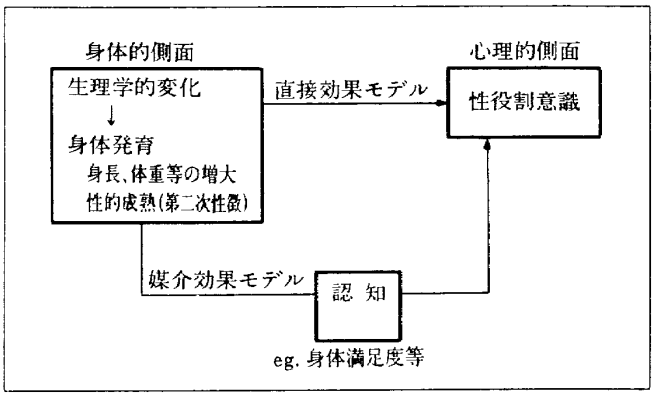


FIG. 1　本研究のモデル

の捉えられ方も変化しているものと思われる（Logan, Calder & Cohen, 1980；大阪府科学教育センター，1970）。

こうした先行研究から見る限り，思春期の身体的変化が何らかの心理的影響をもつことは認められるが，それが否定的なものか肯定的なものか，あるいは重要な決定力をもつものかそうではないのかについて，明らかにはなっていない。本研究は，この点を出発点として，思春期の身体的変化が心理的側面に及ぼす影響を実証的に検討することをねらいとする。

思春期の身体的変化の心理的影響を検証するモデルとして，直接効果モデルと媒介効果モデルが，Petersen & Taylar (1980) によって提唱されている。これは，生理学的変化（ホルモン分泌量の増大等）を思春期の身体的変化の源泉と考え，それらが認知的レベルを通らずに，内的変化として心理的側面に影響するのか，あるいは具体的な身体的変化として認知され，その認知を通じて心理的側面に影響するのかをモデル化したものである。本研究では，ホルモン等の生理学的指標の測定は行わないが，思春期の身体的変化とその心理的影響の関係をより明らかにするため，このモデルを参考にした研究モデルを設定した（FIG. 1）。

まず，従来の研究では身体的変化として，身長の高低，性的成熟の開始等のいずれかひとつをとりあげることが多かったが，本研究では，量的指標として身長，体重等の計測値，質的指標として第二次性徴をとりあげる。さらにこうした身体的変化が，より自己の身体に意識を向けさせること（Koff, Rierdan & Silverstone, 1978）から，媒介効果をもたらす認知的指標として身体満足度をとりあげる。また，これらの影響を受ける心理的側面の指標としては種々の変数が考えられるが，特にこの身体的変化により，少なくとも自分自身の性別が動かしがたいものであると経験されることを考慮する必要がある。そこで，この点から1人の男性，女性としての意識の形成に関係があると思われる性役割意識を心理的側面の指標としてとりあげる。したがって，本研究では，身長，体重等の計測値，第二次性徴の発現の有無及び身体満足度と，性役割意識との関係を，具体的には，以下に示す3点を検討することを目的とする。

(1) 身体発育の直接効果として，生理学的変化の身体的表出である身長，体重等の計測値，第二次性徴の発現という客観的指標のみを用いて，性役割意識との関係を検討する。

(2) 身体発育の媒介効果として，その認知的指標である身体満足度を媒介変数として，これと性役割意識との関係を検討する。

(3) (1), (2)においては，従来の研究と同様に身体発育の各指標ごとに検討するが，これらは相互作用として心理的影響を及ぼすと考えられるので，これらの諸変数全体と性役割意識との関係を検討する。

さらに，本研究のいまひとつの目的は，心理的側面としてとりあげた性役割意識を測定する尺度の作成である。既存の性役割尺度には，柏木 (1972)，Bem (1974)，伊藤 (1978) などが多く用いられているが，ほとんどが大学生以上をサンプルとして作成されたものであるため，思春期，特にその開始時期にあたる小学校高学年生には，用語や項目数などの面で使用が困難であると判断された。そのため，柏木 (1972) を参考にして，この年齢時にも使用可能な青年前期用性役割尺度を作成する。

研　究　I

目　的

青年前期用性役割尺度の作成。

方　法

調査対象　東京都及び千葉県の都市部住宅地域における公立小学校，中学校の各2校から小学6年154名（男子79名，女子75名），中学2年112名（男子63名，女子49名）計266名が対象とされた*。

調査時期　1983年7月

尺度作成の手続

(1)項目の収集　柏木 (1972)，伊藤 (1978) などを参考にして，小学校高学年生に理解可能と思われる男性及び女性に関する特性記述語65語が収集された。次に，心理学専攻大学院生により，これらは東，田中，土屋(1973)の性役割の4次元（外面的事実，個人的行動，社会的行

* 調査対象学年は，研究Ⅱにおける学年設定に準じている。したがって，ここで作成される尺度は，具体的には小学校高学年から中学生までが使えるものとする。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

動，内面的特性）に分類され，各次元10項目から20項目に整理された。

(2)項目の精選 (1)で収集された項目について，小学校高学年生にとって，「望ましい男性像」，「望ましい女性像」を記述する上で，適切と思われる項目を心理学専攻学生15名に選択させた。その結果から一致度の高い項目が各次元4項目から8項目（男性特性，女性特性それぞれ2項目から4項目）計30項目が選ばれ，暫定尺度項目とされた。

(3)調査の実施 上述の暫定尺度項目を用い，男性役割期待と女性役割期待*について，5件法で回答が求められた。

結果と考察

男性役割期待と女性役割期待について得られた合計60反応は，それぞれ役割期待の高い方より5点から1点まで得点化され，柏木（1972）の方法によって分析された。すなわち，各項目ごとに男性役割期待得点と女性役割期待得点の差異得点**が計算され，項目相互のまとまりを得るために，因子分析が行われる。

まず，30項目から，男性役割期待得点と女性役割期待得点の間に有意差のある24項目が選ばれ，この24項目の差異得点について因子分析が行われた。主因子法により2因子が抽出され，バリマックス回転がなされた。その結果，第1因子は負荷量の大きな項目（「たくましい」，「活発な」など）の差異得点がプラスであることから男性特性因子，第2因子は負荷量の大きな項目（「よく気がつく」，「やさしい」など）の差異得点がマイナスであることから女性特性因子と解釈された。そこで，第1因子に負荷量の大きな項目群が男性特性尺度，第2因子に負荷量の大きな項目が女性特性尺度とされた。さらに，望ましい特性という観点から，男性特性尺度では男性役割期待得点が，女性特性尺度では女性役割期待得点が，3.0以上の平均値をもつもの***が最終項目として残された。これらの項目の差異得点について，再度因子分析（主因子法，2因子抽出，バリマックス回転）を行った結果をTABLE 1に示す。

TABLE 1 最終項目の因子分析結果

	項目	I	II	h^2
男性特性	たくましい	.626		.443
	活発な	.536		.287
	がまん強い	.528		.293
	責任感が強い	.466		.219
	勇かんな	.464	−.305	.308
	自信をもった	.417		.187
	積極的な	.404		.172
	自分の意見をはっきり言える	.389		.153
	スポーツの得意な	.304		.098
女性特性	やさしい		.647	.448
	あたたかい		.644	.422
	よく気がつく		.513	.269
	かわいい		.400	.178
	家の仕事が好きな		.396	.220
	明るい		.356	.128
	因子負荷量の2乗和	2.097	1.725	3.822

注）負荷量．3以上のものを示した。

以上により，下位尺度として男性特性尺度9項目，女性特性尺度6項目からなる性役割尺度が作成された。なお，この分析は学年ごと，性別ごとに行った結果がほぼ同様の傾向を示したので，全体こみで行った。

各下位尺度ごとに項目を検討したところ，手続(2)で選ばれた時の特性と一致しており，また，柏木(1972)，伊藤(1978)の尺度と大きな矛盾はないので，内容的にほぼ妥当であると考えられた。他方，信頼性についても，下位尺度ごとに内部一貫性をα係数で求めた結果，男性役割期待得点，女性役割期待得点のそれぞれで，.70以上得られ，おおむね満足された。

研究 II

目的

思春期の身体発育と性役割意識との関係について検討する。

方法

調査対象 性的成熟の指標とした第二次性徴の発現が始まる時期として小学6年が，第二次性徴のほとんどが発現する時期として中学2年が，対象学年とされた****。

* 男性（女性）役割期待は，その特性が男性（女性）にとってどの程度社会的に期待されているかを問うものである。具体的には「男の人（女の人）にとって，次の性質はどのくらい大切だと思いますか。」という教示文と「とても大切だ」から「まったく大切でない」までの5件法を用いた。

** 差異得点＝（男性役割期待得点－女性役割期待得点）で計算された。したがって，プラスであれば男性に対して，マイナスであれば女性に対して，その項目がより強く期待されていることを示している。

*** 中間点である「どちらでもない」という回答に得点3を与えているので，望ましい役割期待であるためには，少なくとも3.0以上の平均値が必要である。

**** 東京都小学校性教育研究会他(1981)によれば，小学6年では男子の約25%が発毛及び変声を，女子の約50%が発毛を，同じく90%が乳房の発達を経験している。また，中学2年では男子の約64%が精通を，女子の約93%が初潮を経験している。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

東京都の都市部住宅地域における公立小学校，中学校の各2校から，小学6年238名（男子126名，女子112名），中学2年207名（男子112名，女子95名）計445名が対象とされた。

調査時期　1983年10月—11月

調査方法　各校各学級ごとに一斉に実施され，多くは男女別々の部屋で行われた。

調査内容

(1)性役割意識の測定　研究1で作成された性役割尺度を用い，男性役割期待，女性役割期待，性役割実現度*の3つの観点から，5件法で評定させた。

(2)身長，体重，胸囲の計測

(3)第二次性徴の発現の有無　男子では，変声，性毛の発毛（以下，発毛とする），精通について，女子では，乳房の発達**，発毛，初潮について，発現したかどうか回答が求められた。

(4)身体満足度の測定　Secord & Jourard (1953) の Body cathexis 項目を参考にして，思春期の身体発育と関係があると思われる14項目が選ばれ，次の4側面について測定された。

1)身体計測値満足度：身長，体重，胸囲（身体計測値として具体的数値で示される箇所）。

2)運動能力満足度：運動能力

3)顔の満足度：目，鼻，耳，口，髪の毛。

4)容姿の満足度：顔全体，スタイル，足，おしり。

なお，回答は14項目それぞれについて，「とても満足している」から「とても不満である」までの4件法で求められた。

結果と考察

1. 性役割意識の全体的傾向

男性役割期待，女性役割期待，性役割実現度の3つの観点について評定された結果，学年×性の4群ごとの男性特性得点（以下，M得点とする）及び女性特性得点（以下，F得点とする）の平均値は，TABLE 2のようになる。

学年×性の2要因で分散分析を行ったところ，3つの観点における全得点で学年差（男性役割期待，性役割実現度の各得点で1％水準，女性役割期待の各得点で5％水準）が，また，男性役割期待のF得点と女性役割期待のM得点（それぞれ5％水準）及び性役割実現度のM得点（1％水準）で性差が認められた***。つまり，中学2年の方が小学6年よりすべてにわたって得点が低く，このような特性に対して，相対的に高い評価をしていないことが示された。また，女子の方が男子よりも男性役割として女性特性を，女性役割として男性特性を高く期待しており，女子は性役割期待について男女両特性の分離を強く求めない傾向が認められる。ところが，性役割実現度では，女子は男性特性を低くしか実現していないと評価している。このことは，女子は理想として両性役割期待において，両性の差を縮小する傾向を見せながらも，実際には女性としての自己については，それほど高く男性特性を実現していないという理想と現実とのギャップを示していると思われる。

TABLE 2　各評定観点におけるM，F得点の平均値

評定観点	得点	小学6年		中学2年	
		男子	女子	男子	女子
男性役割期待	M	4.59	4.54	4.35	4.42
	F	4.03	4.08	3.71	3.88
女性役割期待	M	3.69	3.91	3.65	3.71
	F	4.71	4.76	4.54	4.64
性役割実現度	M	3.68	3.38	3.41	3.01
	F	3.52	3.69	3.34	3.31

また，これらの得点間の相関を見ると，同じ観点でのM得点とF得点の間において，男性役割期待，性役割実現度では $r=.30\sim.70$ を示したが，女性役割期待ではこれよりも小さかった。一方，男性役割期待と女性役割期待の各得点間には，わずかな相関しか見られなかった。また，男子では男性役割期待と，女子では女性役割期待と，性役割実現度との相関は，ほとんどが.30以下であり，社会的期待と実際の実現の程度とがあまり関係していないものと思われる。

2. 身長計測値****と性役割意識

ここでは，身体発育の量的指標として，身長計測値

* 男性役割期待，女性役割期待が各性にむけられた社会的期待であったのに対し，性役割実現度は，自分が実際にその特性をどの程度実現しているかについての自己認知を示すものである。具体的には，「あなたにとって，次の性質はどのくらいあてはまりますか。」という教示文と「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法を用いた。

** 黒川(1977)を参考にして，Stratzの乳房の発達の4期をそれぞれ図示し，それから選択させた。

*** F値は，1％水準で $F_{1,443}=16.610\sim23.234$，5％水準で $F_{1,443}=3.957\sim12.834$ であった。

**** 実際には身長，体重，胸囲の計測を行ったが，学年×性の4群いずれにおいても，これらの間にかなり高い相関が見られたので，本研究では身長計測値を用いる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3 身長計測値の平均値及び上位群・下位群設定の境界値

	平均(SD)(cm)	上位群 境界値(n)(cm)	下位群 境界値(n)(cm)
小学6年男子	145.6(7.6)	153.2(20)	138.0(18)
小学6年女子	145.5(7.0)	152.5(16)	138.5(17)
中学2年男子	159.2(7.9)	167.1(17)	151.3(20)
中学2年女子	153.6(4.7)	158.3(11)	148.9(11)

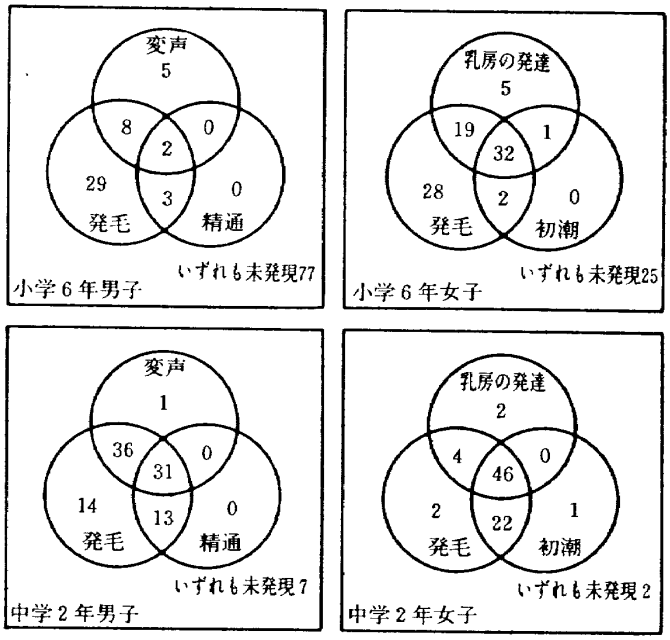
をとりあげる。学年×性の4群ごとの身長計測値の平均値はTABLE 3に示すように，各群とも平均値の周辺に分布が集まっており，上位・下位群の比較をする上で，一般的な上位・下位30%あるいは25%のグルーピングでは適切といえない。そこで，nはやや少なくなるが，より各群の特徴が顕著になるように，平均値から±1SDを境界として，上位群と下位群を設定した（TABLE 3）。

学年×性の4群ごとに，上位群と下位群の得点をt検定した*結果，全体的にあまり差は示されなかった。わずかに小学6年男子の性役割実現度のM得点（下位群：3.38，上位群：4.02，$t_{36}=-2.59$，$p<.05$）とF得点（下位群：3.16，上位群：3.63，$t_{36}=-2.07$，$p<.05$），中学2年女子の男性役割期待のM得点（下位群：4.20，上位群：4.61，$t_{13.02}=-2.45$，$p<.05$）のみで有意差が認められ，いずれも上位群の方が高い得点を示している。小学6年男子についてみれば，身長の高い者がそうでない者よりも，男性特性，女性特性ともに高く実現している結果となっており，従来からいわれてきた知見が確認されたといえよう。

しかしながら，他にはほとんど差が見られず，身長の客観的数値に基づく高低それだけでは，性役割意識とあまり関係がないものと思われる。概して，身体発育のスパートを経験した者の方が身体的に大きいことが多く，上位群をスパート経験者と考えるならば，スパートの心理的影響はあまり大きくないものと推測できる。

3. 第二次性徴の発現と性役割意識

学年×性の4群における第二次性徴の発現状況（FIG. 2）より，男子については変声・発毛→精通の順に，女子については乳房の発達**・発毛→初潮の順に発現するものとおおむね読みとれる。各学年時に顕著な発現として，小学6年男子では発毛（42名，33.9%），小学6年女子では発毛（81名，73.3%），中学2年男子では精通（44名，43.1%），中学2年女子では初潮（69名，87.3%）をとりあげ，学年×性の4群別に発現群と未発現群を設定する。



注）各群とも，不完全回答者は含まれていない

FIG. 2 第二次性徴の発現者数

身長計測値の場合と同様に全体的には，両群に大きな差は認められず，特に，両性役割期待について，小学6年女子の女性役割期待のF得点以外，有意差は見られなかった。このことは，両性役割期待とも第二次性徴の発現の影響をあまり受けていないことを示している。

一方，有意差が認められたのは，小学6年男子，中学2年男子の性役割実現度のM得点（未発現群：3.57，発現群：3.87，$t_{123}=-2.16$；未発現群：3.23，発現群：3.57，$t_{101}=-2.27$，ともに $p<.05$）と小学6年女子の女性役割期待のF得点（未発現群：4.61，発現群：4.82，$t_{36.86}=-2.50$，$p<.05$）であった。なお，有意ではないが，それに近い差が中学2年女子の性役割実現度のF得点（未発現群：3.73，発現群：3.31，$t_{80}=1.86$，$p<.07$）に見られた。両学年とも，男子においては，発現群の方が男性特性より高く実現しているものと推測され，第二次性徴の発現が男性特性の形成を促していると思われる。ところが，中学2年女子では，男子の場合とは反対に，未発現群の方が女性特性を高く実現しているととらえており，初潮が必ずしも女性特性を高める方向には，影響していない。むしろ，中学2年女子の大部分が既潮していることから，この結果は反対に初潮の遅れに対す

* 分散が等質でない場合は，ウェルチの法で検定した。以下も同様である。

** 従来，Stratzの分類では乳暈期を乳房の発達の基準とすることが多かったが，本研究では調査対象の女子のほとんどがこの段階以上であるため，この次の段階である乳房期を基準とした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 4 身体満足度各側面における満足群・不満群の人数

身体満足度の側面	身体計測値		運動能力		顔		容姿	
群	満足群	不満群	満足群	不満群	満足群	不満群	満足群	不満群
小学6年男子	40	25	80	44	57	3	55	19
小学6年女子	35	37	55	57	36	3	18	38
中学2年男子	22	35	59	52	35	11	42	28
中学2年女子	8	37	39	56	17	17	8	48

る心理的影響とも考えられるので，さらに検討が必要である。

これらの結果より，第二次性徴の発現は自己の性別特性を認知する上でいくらかの影響を与えるものの，一般に言われているほど大きくはないことが示唆された。

4. 身体満足度と性役割意識

身体満足度については，身体計測値，運動能力，顔，容姿の4側面それぞれにおいて，どの項目も「とても満足している」か「まあ満足している」と回答した者を満足群，どの項目も「少し不満である」か「とても不満である」と回答した者を不満群とした*。4側面における学年×性の4群ごとの人数を TABLE 4 に示す。

身体計測値満足度

小学6年では，男女とも両群間に有意差はなく，中学2年男子の性役割実現度のM得点（満足群：3.70，不満群：3.12，$t_{55}=2.73$，$p<.01$）で，中学2年女子の同じくM得点（満足群：3.46，不満群：2.76，$t_{43}=2.11$，$p<.05$）とF得点（満足群：4.08，不満群：3.04，$t_{43}=3.99$，$p<.01$）で，いずれも満足群の方が有意に高い得点を示している。特に，中学2年女子では両群の人数比から見ても，不満群の割合が大きく，身体計測値満足度が大きな意味をもっているものと思われる。

運動能力満足度

小学6年では，男子の男性役割期待のF得点（満足群：4.11，不満群：3.88，$t_{122}=2.29$，$p<.05$）で，男女とも性役割実現度のM得点（満足群：3.79，不満群：3.50，$t_{122}=2.16$，$p<.05$；満足群：3.64，不満群：3.12，$t_{110}=4.05$，$p<.01$）で，有意差が認められ，満足群の方が高い得点を示した。また，中学2年においては，男女とも性役割実現度のM得点（満足群：3.59，不満群：3.20，$t_{109}=2.66$；満足群：3.36，不満群：2.77，$t_{93}=4.09$，ともに $p<.05$）及びF得点（満足群：3.48，不満群：3.18，$t_{109}=2.12$；満足群：3.53，不満群：3.17，$t_{93}=2.57$，ともに$p<.05$）で有意差が認められ，同様に満足群の得点が上回っている。性役割実現度のM得点では，いずれの群においても満足群が有意に高い得点を示していることから，また，男性特性尺度に「スポーツが得意な」という項目が含まれていることからも，運動能力の満足すなわち運動が得意であることが，男性特性を高めているものと考えられる。さらに，中学2年では男女とも満足群の方がF得点も有意に高く，この年齢時では運動能力の満足が女性特性を高めており，運動能力が性役割意識を含めた自己概念を形成する上で，意味をもつことが示唆された。

顔の満足度

性役割実現度において，小学6年男子のM，F両得点（満足群：3.74，不満群：2.79，$t_{58}=2.03$；満足群：3.60，不満群：2.53，$t_{58}=2.45$；ともに $p<.05$），小学6年女子のM得点（満足群：3.79，不満群：2.69，$t_{37}=2.75$，$p<.01$），中学2年男子のM，F両得点（満足群：3.69，不満群：2.94，$t_{44}=3.14$，満足群：3.55，不満群：2.51，$t_{44}=4.41$，ともに $p<.01$），中学2年女子のM，F両得点（満足群：3.38，不満群：2.56，$t_{32}=3.11$；満足群：3.85，不満群：2.88，$t_{32}=4.19$，ともに $p<.01$）で，満足群が不満群よりも有意に高い得点を示している。また，性役割期待においては，小学6年女子の男性役割期待のF得点（満足群：4.03，不満群：4.60，$t_{37}=-2.10$，$p<.05$）のみで，不満群の方が有意に高い得点を示している。ここでは，特に性役割実現度で，運動能力満足度と同様に顕著な差がみられ，自分の顔に満足している者の方が，男性特性，女性特性のいずれも高く評価しており，顔の満足度が自己の性役割実現度を評価する上で重要であるといえる。

容姿の満足度

中学2年男女では，顔の満足度と同じく，性役割実現度のM得点（満足群：3.69，不満群：3.07，$t_{68}=3.26$；満足群：3.58，不満群：2.73，$t_{54}=3.27$，ともに$p<.01$）及びF得点（満足群：3.51，不満群：3.08，$t_{68}=2.33$，$p<.05$；満足群：4.17，不満群：2.94，$t_{54}=5.65$，$p<.01$）で有意差が認められ，満足群が不満群よりも有意に高い得点を示している。ところが，小学6年では，男子で性役割実現度のM得点（満足群：3.86，不満群：3.16，$t_{72}=3.67$，$p<.01$）のみで有意差が認められただけで，女子においては，有意差が見られなかった。このことは，中学2年において，顔の満足度と同様に，容姿の満

* 予備的に，4側面14部位それぞれに対する満足度間の相関を求めたところ，かなり高い値が得られたが，4側面すべての満足群及び不満群に同一被験者の重複はわずかにしか見られなかったので，各群ともその側面の満足，不満を独立に示しているものと考えられる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 5 数量化Ⅰ類の結果（M得点）

説明変数	カテゴリー	小学6年 男子 重み	小学6年 男子 偏相関係数（レンジ）	小学6年 女子 重み	小学6年 女子 偏相関係数（レンジ）	中学2年 男子 重み	中学2年 男子 偏相関係数（レンジ）	中学2年 女子 重み	中学2年 女子 偏相関係数（レンジ）
身長計測値（cm）	（以上）（未満） — 135	.124	.302	.049	.121	—	.185	—	.138
	135 — 145	−.244	(.504)	−.089	(.245)	.214	(.421)	−.261	(.344)
	145 — 155	.182		.053		.099		.083	
	155 — 165	.260		.156		.063		−.063	
	165 —	—		—		−.207		−.099	
第二次性徴	未発現	−.031	.060	.023	.021	−.220	.332	−.078	.045
	発　現	.058	(.089)	−.009	(.031)	.280	(.500)	.011	(.089)
身体満足度	14 — 20	—	.286	—	.328	−1.246	.430	−.582	.497
	21 — 27	−.581	(1.221)	−.315	(.912)	−.586	(1.899)	−.499	(1.617)
	28 — 34	−.287		−.133		−.112		.014	
	35 — 41	.053		.021		.050		.408	
	42 — 48	.115		.597		.577		1.035	
	49 — 56	.640		−.245		.653		—	
重相関係数（説明率）		.454	(.206)	.344	(.118)	.500	(.250)	.513	(.263)

足度が男性特性，女性特性の評価に関係しており，これらの満足度すなわち外見的に人からどのように見られているかということが大きな要因になっているものと考えられる。

身体満足度全体として

以上より，身体満足度では，3つの観点のうち性役割実現度とより関係していると思われる。小学6年では主として運動能力と顔の満足度が，中学2年では4側面全般にわたる満足度が，自己の性役割として男性特性，女性特性を評価する上で，影響していることが，指摘できる。さらに，中学2年の方が，身体満足度という自己の身体の認知的側面の影響を強く受けていると推測される。また，有意差を示す箇所では1つを除き，他すべてで満足群の得点の方が高く，身体満足度が高いほど男女両特性を高く実現していると言える。

5. 身長計測値，第二次性徴，身体満足度の相互作用と性役割意識

これまで身長計測値，第二次性徴，身体満足度の身体的変化の各指標ごとに，性役割意識との関係を個別に検討してきたが，実際にはこれらがおのおの別に影響しているというよりは，相互作用として性役割意識に影響していると考えられる。従来の研究の多くは，諸要因を個別に検討しているにとどまっており，必ずしも複数の要因の相互作用としての影響には，目を向けてこなかった。そこで，本研究ではさらに身体計測値，第二次性徴，身体満足度の相互作用としての影響を，数量化Ⅰ類により検討する。

これまでの分析により，性役割意識の特に性役割実現度について，多くの有意差が見られ，身体的変化の影響をより強く受けていると考えられるのに対して，両性役割期待ではあまり有意差は見られず，社会的ステレオタイプとして存在していると推測される。また，身体的変化の3つの指標については，性役割意識に対して大きさは明確でないが，何らかの影響をもつことが示された。そこで，ここでは性役割意識として性役割実現度をとりあげ，これが3つの身体的変化の指標でどの程度説明され，その際どれがより強く寄与しているかを検討する。具体的には，性役割実現度のM得点とF得点をそれぞれ目的変数とし，3つの指標を説明変数として，学年×性の4群ごとに数量化Ⅰ類*によって分析を行う。

M得点について（TABLE 5）

各群の重相関係数は，小学6年では男子が.454，女子が.344，中学2年では男子が.500，女子が.513で，小学6年女子がやや低い数値を示している。したがって，これらの説明変数群によりM得点の変動のうち，約12%～26%が説明される。この説明率は，必ずしも大きいとは言えず，性役割意識に影響を与える身体的変化以外の要因の存在が示唆される。この重相関係数のもとで，各説明変数の偏相関係数から，M得点に対する相対的寄与の

* 数量化Ⅰ類を行うため，次のようにカテゴリーを設定した。身長計測値については，10cmごとに5カテゴリーを設定した。また，身体満足度については，14部位の得点を主成分分析したところ，第1主成分で多くが説明され，いずれも高い負荷量を示したので，14部位の得点の合計を身体満足度得点とした。この得点は，14点から56点まで分布し，高いほど満足度が高いことを示しており，14点から7点ごとに6カテゴリー（最後のカテゴリーのみ8点）を設定した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 6 数量化Ⅰ類の結果（F得点）

説明変数	カテゴリー	小学6年 男子 重み	小学6年 男子 偏相関係数（レンジ）	小学6年 女子 重み	小学6年 女子 偏相関係数（レンジ）	中学2年 男子 重み	中学2年 男子 偏相関係数（レンジ）	中学2年 女子 重み	中学2年 女子 偏相関係数（レンジ）
身長計測値（cm）	（以上）（未満）								
	－135	.125	.294	.058	.087	—	.254	—	.112
	135－145	－.229	(.451)	.031	(.160)	.115	(.441)	－.085	(.148)
	145－155	.222		－.054		.174		－.052	
	155－165	.088		.106		.059		.063	
	165－	—		—		－.267		－.082	
第二次性徴	未発現	－.011	.022	－.046	.247	－.132	.221	.105	.072
	発　現	.020	(.031)	.018	(.064)	.168	(.300)	－.015	(.120)
身体満足度	14－20	—	.198	—	.245	－1.382	.413	－.714	.620
	21－27	－.297	(.688)	－.186	(.617)	－.583	(2.126)	－.418	(1.808)
	28－34	－.202		－.034		.007		－.095	
	35－41	.011		－.028		.037		.597	
	42－48	.121		.417		.241		1.094	
	49－56	.391		－.200		.744		—	
重相関係数（説明率）		.379	(.144)	.254	(.065)	.481	(.231)	.645	(.416)

大きさを見ていくと，次のようになる。小学6年においては，男子では身長計測値と身体満足度が，女子では身体満足度が大きく，一方中学2年においては，男子では身体満足度と第二次性徴（精通）が，女子では身体満足度が大きい。いずれの群においても，身体満足度の相対的寄与が大きく，カテゴリーに付与された重みから判断すれば，小学6年女子を除いて，身体満足度が高いほど男性特性を高く実現しているととらえている。また，男子においては，身体的変化の量的指標である身長計測値（小学6年），質的指標である第二次性徴（中学2年）の寄与も大きく，身体発育の直接的な影響も相対的に強いことが示唆された。先と同じく，カテゴリーに付与された重みから判断すれば，身長が高いほど，第二次性徴（精通）が発現している者の方が，男性特性の実現度を高くとらえている。

F得点について（TABLE 6）

各群の重相関係数は，小学6年の男子で.379，女子で.254，中学2年の男子で.481，女子で.645を示しており，小学6年では，かなり小さいものとなっている。これらの説明率を記すと，順に.144，.065，.231，.416となり，中学2年の女子以外ではわずかにしか説明できず，M得点と同様に，その他の要因の存在が示唆される結果と言えよう。各群における説明変数の相対的寄与として，小学6年の男子で身長計測値が，女子で身体満足度が，また中学2年の男子で3変数いずれも（特に，身体満足度）が，女子で身体満足度が強い。やはり，女性特性の実現においても，身体満足度との関係が強く，満足度が高いほど女性特性を実現しているととらえている。

全体的考察

FIG. 1に示すモデルに従い，身体発育の量的指標である身長計測値，質的指標である第二次性徴（性的成熟），また身体発育の認知的指標として身体満足度をとりあげ，性役割意識との関係を検討したが，全体的には次のように言えよう。

(1)身体発育の直接効果について

身長計測値と性役割意識との関係は，小学6年男子以外ではあまり見られず，単に身長の高低だけでは性役割意識に影響を与えないと言える。また，性的成熟については，必ずしも大きいと言えないが，自己の性別特性を認知する上で，影響を与えることが示唆された。これらの結果による限り，認知的側面を含まない身体的変化の客観的指標だけの心理的影響が，明確に示されたとは言えない。したがって，こうした2つの身体発育の指標から推測すれば，身体発育それのみの直接効果は，一般に言われているほど大きくないと考えられる。さらに，明確な生理学的変化の直接効果を検証していくためには，ホルモン測定等生理学的指標に基づく検討も必要である。

(2)身体発育の媒介効果について

身体発育の認知的指標としてとりあげた身体満足度について，その満足群と不満群との間に有意差が認められた箇所は，ほとんど性役割実現度においてであり，小学6年よりも中学2年の方がより顕著な差を示した。また，満足群の方が不満群よりも高い得点をあげていることから，自己の身体に対する満足度が高いほど，男性特性，女性特性とも高く実現しているととらえている。特に，中学2年の段階では性役割意識を形成する上で，身

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

体満足度が意味をもつといえる。

このことと，(1)の知見とを考えあわせれば，身体満足度のみならず，身体的変化の認知的指標が性役割意識の形成により大きく寄与しており，その媒介効果の方が大きいものと考えられる。

(3)身体的変化の諸指標と性役割意識との関係について

(1)，(2)より，性役割意識における3つの観点のうち，性役割実現度に，身体的変化の諸側面の影響が見られたが，男性役割期待，女性役割期待についてはあまり影響は見られず，これらは社会的ステレオタイプとして存在しているものと思われる。この身体的変化の諸側面を示す指標（身長計測値，第二次性徴，身体満足度）により，性役割実現度の男性特性得点の約12%～26%が，女性特性得点の約7%～42%が説明される。相対的な寄与として，全体的には身体満足度が，男子では身長計測値，第二次性徴も，大きいことが認められた。しかしながら，この説明率は必ずしも大きいものではなく，これらだけで十分に説明できるとはいえず，これら以外の諸要因の影響が予測される。

以上述べてきたように，本研究においては思春期の身体発育が，青年の心理的側面としての性役割意識に及ぼす影響は，あまり大きいとは言えなかった。この結果については，実証的・横断的方法によるものであるという限界を踏まえつつ，さらに個別的・縦断的方法によっても検討されねばならない。また，心理的側面の他の指標に関する検討とともに，身体発育に関して，ホルモンレベルでの生理学的な検討，青年がそれをどうとらえるかという認知的側面からの多様な検討も必要と思われる。

引用文献

Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155–162.

Cole, L. & Hall, I. N. 1970 Psychology of adolescence. Holt

Greenberg, R. P. & Fisher, S. 1984 Menstrual discomfort, psychological defenses, and feminine identification. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 6, 643–648.

東俊子・田中久子・土屋和子 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究，**21**，48–53.

伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究，**26**，1–11.

Jones, M. C. & Mussen, P. H. 1958 Self-conceptions, motivations, and interpersonal attitudes of late- and early-maturing girls. *Child Development*, **29**, 491–501.

柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究，**20**，48–59.

Koff, E., Rierdan, J. & Silverstone, E. 1978 Changes in representation of body image as a function of menarcheal status. *Developmental Psychology*, **14**, 635–642.

黒川義和(編) 1977 児童・生徒の性意識・性行動とその形成要因の分析—1977年の調査結果から— 日本性教育研究会

Logan, D. D., Calder, J. A. & Cohen, B. L. 1980 Toward a contemporary tradition for menarche. *Journal of Youth and Adolescence*, **9**, 263–269.

Mussen, P. H. & Jones, M. C. 1957 Self-conceptions, motivations, and interpersonal attitudes of late- and early-maturing boys. *Child Development*, **28**, 243–256.

大阪府科学教育センター 1970 男女両性教育に関する基礎的研究Ⅴ，10–33.

Peskin, H. 1967 Pubertal onset and ego functioning. *Journal of Abnormal Psychology*, **72**, 1–15.

Petersen, A. C. & Taylor, B. 1980 The biological approach to adolescence: Biological change and psychological adaptation. In Adelson, J. (ed.), Handbook of Adolescent Psychology. Wiley.

Rierdan, J. & Koff, E. 1980 The psychological impact of menarche: Integrative versus disruptive changes. *Journal of Youth and Adolescence*, **9**, 49–58.

Secord, P. F. & Jourard, S. M. 1953 The appraisal of body-cathexis : Body-cathexis and the self. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 343–347.

東京都小学校性教育研究会，東京都中学校性教育研究会，東京都高等学校性教育研究会 1981 児童・生徒の性意識・性行動—東京都小・中・高校生に関する調査報告 教育開発研究所

付記

本論文は，1983年度筑波大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものです。御指導いただきました筑波大学教授加藤隆勝先生に厚く感謝いたします。また，調査に御協力下さいました学校の先生方，児童生徒のみなさんにお礼申しあげます。なお，本研究の一部は，日本教育心理学会第26回総会で発表した。

(1985年8月16日受稿)

NII-Electronic Library Service